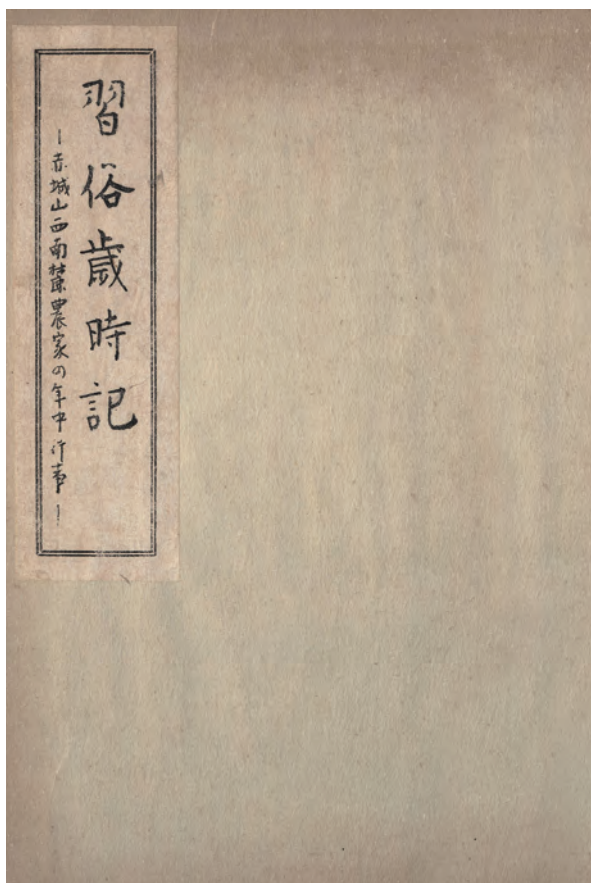


習俗歳時記

— 赤城山西南麓農家の年中行事 —

復刊版

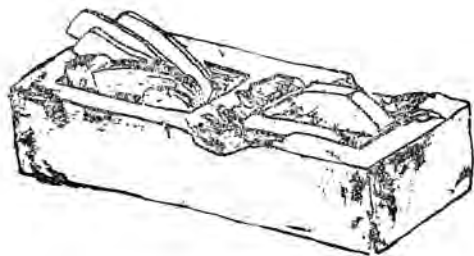


群馬地域文化振興会

習俗歳時記

— 赤城山西南麓農家の年中行事 —

今井善一郎



序に代へて

原田 龍雄 様

一昨年御命囑が御座ゐましてから思ひ乍ら延びくになつて居りました村の民俗調の中、年中行事の分だけやつと出来上りました。大變遅くなりまして申譯け御座ゐません、一つには子供の長い病氣の爲でもあります、一つには拜借した柳田先生の語彙などをみますと、もう立派に全國の調が出来て居て、私などがこれとは思つた様の習俗が皆出て居りますので自ら興味が索然として書き續けなかつたのです。田舎者の民俗學などはあの大先生の前に出ると所詮、釋迦の掌から飛び出られない孫悟空です。

それに御報告だけでしたら原稿だけでよろしかつたのですが、今春師範校の千々和先生の御指導下に縣下の『家の研究』を郷土史研究同攷會の先生方がなされます由で、桃井校の萩原進先生から何か私にもとの御話で御座ゐました。その時原田様への御約束もまだ果さない事を考へまして、そのお話をしましたら「ならその年中

行事を」といふ話で御座りました。その時「これは天の鞭といふものかも知れぬ」と私は考へまして御受したのです。原稿が出来上りました時、一寸萩原先生に見ていたゞいてと思ひまして先生の方へ先に御とゞけしましたら、この種の報告が縣下で稀しかつたものですから萩原先生から煥乎堂の高橋富貴一様に御見せ下さつて御兩人して斯様な書籍にして下さつたのです。御二人の方には全く感謝に堪へませんこの程度でわざ／＼一冊の本になる價値のない事は申す迄もなかつたのですが、つひ御厚意に甘えてしまひました。もとより一家を主とした記録ですから世評は顧慮しませぬ。只々原田様御老體の心血を傾けて居られます勢多郡誌の御編纂にどれ程の御參考にでもなりますれば幸甚と思ふ許りです。

昭和十六年初夏

今 井 善 一 郎

目次

一、火打箱	一
二、春の装ひ	四
三、年越し	七
四、元日	九
五、家内の神々	一四
六、謠ひ初めと初荷	一九
七、元三大師	二〇
八、お棚探しとお寺様の年始	二三
九、味噌増たき	二六
一〇、火伏せの呪ひ	二七
二、六日年越	二七
三、山初め	二八
三、七草	二九
一四、倉開きと作立て	三二

一五、觀音祭	三三
一六、どん／＼小舎	三四
一七、飾りかへ	三七
一八、小正月の行事	三九
一九、二十日正月と恵比壽講	四一
二〇、雪と空つ風	四二
二一、先祖祭と二郎の一日	四三
二二、節分	四五
二三、お事八日	四六
二四、初午	四七
二五、大般若講	四八
二六、祈年祭	四九
二七、天神待	四九
二八、春の彼岸	五一
二九、雛祭	五一
三〇、鎮守祭禮	五四

三、野山の遊び	五
三、鳥獸往來	六一
三、五月節供	六三
三、農繁	六六
三、農休	七一
三、土用干	七二
三、井戸がへ、池がへ	七三
三、雷	七四
三、石尊様	七五
四、釜の口あさ	七五
四、七夕	七六
四、墓掃除	七七
四、盆棚	七八
四、盆の送迎	八〇
四、盆踊り	八三
四、草むしり	八四

四、八	朔	八五
四、秋	の彼岸	八七
四、月	見	八八
五、秋	祭	八八
五、十	日 夜	九〇
五、恵	比 壽 講	九二
五、	新嘗祭と稻荷祭	九三
五、	落葉かきと薪山	九四
五、煤	掃	九五
五、夕	ネ エ ヒ	九六
五、夜	業	九七
五、大	祓	九八
補	遺	九九
略	案 引	一

としごとの家のならはし

一 火 打 箱

年男の譲り受けは火打箱でなされます。私の父は十人もの兄弟がいましたので叔父達は小學校の終り頃になると順次にその兄からこの神聖な切火の道具を譲り受けただけです。私も尋常五年の頃一番若い叔父からこの年男の唯一の道具を譲り渡されました。そしてしばらくしてやはり小學生であつた弟に譲つたのでしたが唯一の弟が成人して家を離れると年男の仕事は長男である私に逆戻りしてしまひました。やがて自分が四十男になつて子供に改めてこの仕事を譲る迄この火打箱と古い家の習俗とを守りつゞける立場となりました。

日本武尊が御東征の折御叔母の命から御受けになつたのも燧の道具であつたと申します。火が神聖なカミの象徴であるならば火打の道具は古くその祭具として現在のマツチと異なる用途をもつたものと思ひます。その頃の石や金がいかなるものでありましたか知りませんが現在

私の家で使用して居りますのは、石は普通燧石といふ半透明の石英質のもので金は鋼で厚二分巾一寸長さ二寸五分程の長方形の板であります。板の中央に「吉井」と刻してありますのは明治の始めまで火打金の産地で名高かつたあの多野の古驛の名前でありませう。古くから使つた金は撥形に中央が凹んで居ります。ホクチは昔から手製で、麻の葶殻のよく乾燥したのを焼いて作つた消炭であります。火打箱の構造は中に仕切のある細長い四角の箱で、中央の仕切によつて一方が石、金、附木等の入れ場所一方がホクチ入れとなつてゐます。ホクチ入れの方は一寸したつまみのある落し蓋があつて、使用後自然に酸素の供給を斷つて消す様になつてゐます。燧石と火打金との打合せによつて發した火花はホクチにうつり靜かに廣がります。之を附け木にとつて御燈明の燈芯に移すのです。

お正月とお盆の月は何回もこの火打道具を用ひますが平常の月も神様に上る火はすべて之を用ひます。少なくとも一日、十五日、二十八日の三日の前宵サンジツはこの切火を上るのです、長い間この火打石を用ひてゐて思ふ事は火をさる時の心の事です。何か不満や不平があつたり怒り氣味であつたり又他の仕事の事を考へ乍ら火をさりますとどうもうまく點火しないのです。火の出ない時の心の反省が私の考へをその様に導くのかも知れませぬが、結果からみて